第二特集

菅野祥孝氏を悼む

（スガノ農機㈱相談役）

座談会

積年良土思想とは何だったのか（前編）

去る7月15日、スガノ農機㈱相談役の菅野祥孝氏が亡くなった。氏は生前、「積年良土」というテーマで数々の講演を行なってきた。農作物の生産のために多大なるエネルギーが消費される現状を憂え、脱売上思考、脱化学肥料万能思考、脱土壌消毒、脱過粉砕、脱収奪・荒廃といった考えを包括する積年良土こそが、年を重ねるごとに土を良くする基本であり、もうかる農業への戦略だと氏は訴えた。その思想をよく知り、時代を共に生きた村井信仁氏をはじめ、4人の農業経営者が一堂に会し、菅野祥孝氏の積年良土思想について北海道上富良野町にある土の館で語り合った。また、同氏が登場した本誌2005年7月号の「編集長インタビュー」を再録する。誌面を通じて氏のご冥福を心よりお祈りしたい。



菅野祥孝氏

1933年、北海道上富良野村（現・上富良野町）生まれ。46年、第二次世界大戦の敗戦で旧満州国から帰国。72年、スガノ農機㈱の三代目社長に就任。05年、相談役に就任。同年、黄綬褒章を受章。06年、紺綬褒章を受章。11年7月15日、79歳で永眠。

昆吉則　スガノ農機㈱相談役の菅野祥孝氏が7月15日に亡くなられました。そこで今日は菅野相談役を偲び、同氏は我々に何を伝えようとしていたのかを語り合いたいと思います。

祥孝さんは「積年良土」と題して一連の講演をなさっています。それは、農業や事業経営にとどまらず、人生の哲学、人間の生き方の話と私はうかがっておりました。人生には努力しても思い通りにいかないことがある。でも、それを踏み越えていくだけの準備というものを我々はどれだけやっているのだろうか。「積年良土」という言葉にはそんな意味が込められていると思います。祥孝さんの積年良土思想とは何だったのだろうかというのが本日のテーマです。

まずは村井先生に祥孝さんの人となりの前提にあるスガノ農機の歴史からお話しいただけますでしょうか。

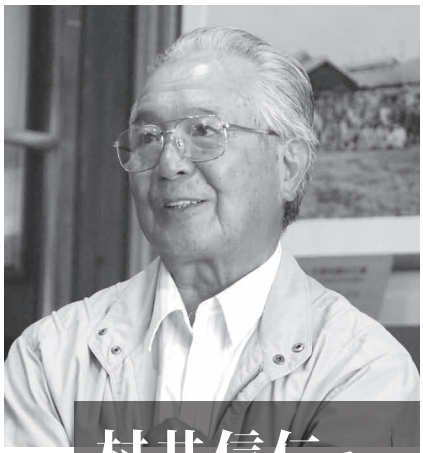
創業、満蒙開拓、引き揚げ

村井信仁　スガノ農機が上富良野で創業したのは大正6年。第一次世界大戦の真っ只中です。北海道はこの戦争ですごく潤いました。ヨーロッパは戦乱の渦に巻き込まれて食料が不足します。世界中から食料を買い集め、北海道から売れたのは菜豆や馬鈴薯でん粉などでした。乾物ですからヨーロッパに送れ、それまでの3倍くらいの値段で売れて経済的に潤います。そのころ、鍛冶屋も頑張りました。スガノもその好景気のなかで創業します。ところが、日中戦争が始まって、たしか昭和16年だったと思いますが、満蒙開拓団のメンバーとして満州に渡ります。向こうで畜力プラウが必要だとして、北海道から十何社かが行けということになりました。統制経済の時代ですから鋼材の配給なども管理されていて、国内ではやっていけないという事情もありました。その後、無一文で満州から戻ってきます。日本に戻ってくるまでにはすごい経験もしたようです。創業の地に戻ってきたときは皆に快く迎えられ、皆の支援で再創業しました。

昆　創業者で祥孝さんの父親である菅野豊治さんですね。

村井　長男の良孝さんは軍隊に入っていましたが、少し遅れて無事戻ってきました。豊治さんも良孝さんもどちらかというと技術派の人で、北海道では名工の誉れ高い人たちです。祥孝さんは家業を手伝うようになると営業を担当しました。かなり厳しい人でした。スガノを背負って立つというような気迫がありましたからね。昭和38年ごろにはプラスチックはつ土板のプラウが出るんです。トラクタになってはつ土板に土が付着して苦労した時代があるんですが、プラスチックはつ土板で何とか解決します。実は高北農機（現・タカキタ）が先に特許を取っていたんです。だけど、スガノにしてみればボトムプラウに命を賭けて土壌付着に対応しているときに、「内地から来て俺の特許だと。オラはその前からやっているんだ。権利がないだけの話だ」ということで特許の無効審判をやります。ここでスガノは勝つんですが、考えとしては無効になればいいということで、裁判経費を払ってもらうこともできたものの、それすら要求せず、自分たちは作れればいいんだということでした。

その時代からプラウがトラクタプラウに形を整え、ヨーロッパの機械の模倣から北海道らしいプラウの時代を迎えます。祥孝さんはそのなかで営業責任者ですからかなり闘達な人だったんですね。おとなしいように見えるんですが、創業者の厳しい精神というか闘争心みたいなものを受け継いでいました。我々は昭和一ケタ世代で、私は昭和7年生まれで、祥孝さんは8年ですが、だいたい同じ感覚で物事を考えます。それからあのころの研究は産学官共同という時代でした。トラクタなども当時はわからないので皆で一緒にやるという具合だったんです。北大の常松先生がメーカーの面倒を見ました。そのころから私は畜大の卒業で兼任教授だったものですから、常松先生が北海道のプラウメーカーを束ねるといったときにいろんな人を紹介してくれたわけです。ですからそんな関係で豊治さんとも良孝さんとも祥孝さんとも昭和30年代から付き合いました。私自身、トラクタプラウの設計の関係が卒業論文のテーマだった



村井信仁氏

1932年、福島県生まれ。55年、帯広畜産大学卒業。農業機械メーカーを経て、北海道立農業試験場へ。89年、㈳北海道農業機械工業会専務理事。農業の現場に即した機械開発、研究、指導で農業経営者の厚い信頼を得た。退任後、67歳にして就農を果たす。農学博士。

こともあり、プラウにはすごく興味を持っていました。同じ感性というか同じ年代ですから、祥孝さんにはずいぶん刺激されました。私も祥孝さんに負けないように頑張らなくてはいけないなという感じだったわけです。

十勝岳噴火と復興の歴史

昆　祥孝さんが満州から帰ってきたときは少年でした。目の前でリンチや強奪、女性が強姦される場面も見て、そのなかで同じ日本人が同胞を裏切っていくような姿もご覧になってきたそうです。そんな引き揚げ体験が祥孝さんにとって大きかったのでしょう。それから土の館のモノリスに込められた思い。十勝岳の噴火による泥流の被害を受けた農地とそれを復興させた農民たちの力と誇りを祥孝さんは強く印象づけられていたようですが。

村井　それは豊治さんにずいぶん話を聞きました。上富良野付近では約７００haが泥に埋まりました。

昆　それは何年のことですか。

村井　大正15年の5月です。１４０人以上の方が亡くなっています。残雪を溶かした硫黄混じりの泥流が一瞬のうちに約７００haを襲い、１mの厚さで覆いました。それでは作物は何もできません。でも、農家たちは山から粘土を運んで泥流の上に客土しました。トロッコなんかも使うんですが、モッコを担いで、冬は馬そりです。そのときに豊治さんは作業を容易にするためにいろんな機械を作っています。そのことから人間はダメになった土でも良くすることができると教えられたのでしょう。そこで南米に行ったときに砂漠をいい土にした……。

昆　ペルーに入植した福田さんが長い年月をかけて砂漠をオレンジの森にしたことに出会われた体験ですね。

村井　その二つのことを祥孝さんは重ね合わせてみていたのではないでしょうか。ですから、この上富良野という場所は一度ダメになってしまった土地を人々の力で元に戻した記念すべき場所だと思っていたのでしょう。ここにお墓があって、そのお墓の前に土地を買い、事務所を移転してそこを農業機械の実験地にしたいと動いたのも、創業精神を忘れないためにここを充実させようとしたからですね。

　それとスガノは、たまたま景気のいいときに昔工場のあった場所が売れ、土の館を建てました。お金を持っていてもしょうがないからもっと有効に使えないか。それで、「祥孝さん、ヨーロッパと同じような技術博物館を作らないか」と勧めたんです。耕すことに焦点を当て、なぜ人は耕すのか、耕すことによって土地はどうなるのか、そのことによって人がどう潤うのかというようなことを体感できる農業技術博物館を作ろうと。そして80数台のトラクタ。ほとんどが昭和30年代のもので、当時、家1軒するほど高かったトラクタです。買った人たちはだいたい30代の若い農家たちで、勝部さんは20代で買っています。昼も夜も通しで働いて、賃作業で2年くらいで元を取りました。すごい時代があり、人もいたわけです。そういったものを粗末にできないということで集めました。トラクタの歴史を見るだけでも価値があるわけですね。プラウそのものがどう変わったかもわかります。平成16年には北海道遺産に認定されました。祥孝さんと元専務で初代館長の穐吉さんがいたからこそできたことです。

昆　どうもありがとうございました。今、土の館のお話が出ましたが、読者やスガノの機械を使っている方はずいぶんおたずねくださっています。現在、東日本大震災があって多くの方々がご苦労されているわけですが、先ほどの十勝岳の噴火とそこから立ち直った農民の勇気と知恵というものに触れることは今こそすごく意義があります。ぜひ多くの皆様におたずねいただければと思います。

北海道土を考える会

昆　村井先生がお話しいただくことのなかで、「篤農家の言葉は篤農家が理解する。篤農家にしか理解できない」というのがありますね。祥孝さんが土を考え、プラウを考え、あるいは自らの経営を考えるときに、土に対しての思いを持った優れた農業経営者の方々を先生や師としておられました。特に北海道土を考える会の創立につながる北海道全土から集まった27人による会合。勝部さんと父上の徳太郎さんを含めて、そのとき初めて出会った方も多かったそうですが、当時のことを勝部さんからお話しいただけますか。

勝部征矢　27人の人たちが集まって発足したという以前に、札幌近郊で比較的大きな農業をやっている人が5～6人、夫婦で1年に2、3回は集まっていました。当時、経営をちょっと大きくすると異端児扱い、変わり者扱いを受けた時代で、本当に自分のやっていることが間違っていないのかを確認するために集まっていました。そのなかに今の日本ニューホランドの社長さんやスガノの営業部長だった中山くんもご夫婦で入っていて、彼に札幌近郊だけの

集まりにしておくのはもったいないから、全道的なものにして勉強会なり情報交換会なりにしたらいいのではないかと話しました。僕らは願ったりかなったりですし、祥孝さんの目的にもかない、自分が考えていることを広めていくにもいいはずだと思いました。ということで、まず27人が集まってそれから爆発的にその輪が拡がりました。

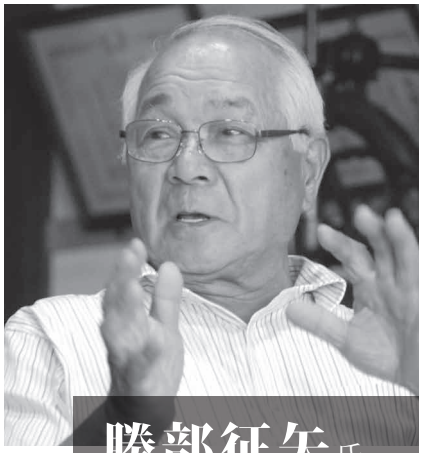
集まる前に祥孝さんは夢を語っていました。この人、本当にそれを全うする気があるのかと思ったほどです。ちょっと人間離れして言葉も神がかり的なところが多かったもので。まあ10年くらいで狸のしっぽが出てくるだろうと。そうしたら踏みつけてやろうと考えていました。ところが、10年経っても15年経ってもしっぽが出てこないんです。むしろ、ますます熱がこもってくる。いよいよ本物だぞと思って、これは死ぬまでお付き合いできると思いました。ここ20年くらいはもうそんな話はする人がいなくなりましたが、そんな感じでした。

昆　北海道土を考える会は全国土を考える会に発展しているわけですが、この創立時点から指導役でもあった村井先生に当時のことをもう少し補足していただければと思います。

村井　昭和53年というと、稲作の転作が一般化して畑作地帯でも小麦を作るようになります。実は昭和40年代に小麦は幻の作物になると言われたんです。田中角栄首相が国際分業論をぶち上げて、「日本は工業国だ。自動車や電気製品を売って食料を買う」と言ったんです。それでいいよ3％の自給率の小麦がこれで消えるかとなりました。ところが昭和46年からコメが余り、何を作らせるかといったら小麦と大豆だと。あのころの農機メーカーというのは春農具、夏農具、秋農具の3つを持つのが普通でした。スガノの場合はプラウ、カルチベータ、ビートハーベスタを手がけていました。でも小麦が増えてくると、プラウは春だけでなく夏も使うことになります。昭和50年代に入るとかなりトラクタ化が進みますから、時間的に余裕が生まれて秋起こしも出てくる。プラウが1年通じて使えるわけです。そうなると本物のプラウメーカーになるべく余分なものを切り捨てようと考えました。まず、カルチベータ。そして、ビートハーベスタも他社に技術を譲り、プラウ一本になる。祥孝さんにしてみれば踏み切るにはやはり不安なわけですよ。

昆　当時としてはビートハーベスタは作業機のなかで一番値段が張るものですよね。プラウは今のリバーシブルではなくて本当に小さいものでしたが。

村井　でもね、やっぱり本物を作るときは専門メーカーに徹するべきというあの人の哲学があったわけです。私も相談を受けました。「村井さん、全道の土を知り尽くさなければならない。何かいいアイデアはないか」と。私は、篤農家は土を大事にするので土地の生産性が高いんだと思います。それで経済的に恵まれるから経営面積を増やしていける。営業所にお触れを出して、全道各地の篤農家の話を聞く機会があってもいいのではないかと助言しました。あのころはフォード会とかファーガソン会とか毎年冬期研修会みたいなことをやっていたわけです。私も参加していました。それで北海道土を考える会には27人が集まりました。篤農家の話



勝部征矢氏
（北海道栗山町）
170haという日本最大の麦単作経営を行なう。連作障害の常識を打ち破り、40年以上の連作という神業を成し遂げる。しかも、収量は地元生産者の倍。先代の徳太郎氏と共に「北海道農業界の伝説」との異名を持つ。



玉手博章氏
（北海道留寿都村）
隣村で発生したジャガイモシストセンチュウを機に抵抗性品種で食味が良かったキタアカリに目をつけ、それに特化した生産を始める。販売はすべて自らの手で行ない、現在も新たな顧客開拓に向け、観光農園や農場カフェの建設を進めている。

は篤農家がわかるんですね。これはいいということになり、来年もやってくれとなりました。「心土破砕機の爪が減らないようにできないのか」「プラウもまだ改良の余地がある」などといろんなクレームが出てくるわけです。完璧といえないまでも努力しますと答え、土地もありますので実演研究会もしましょうとなり、それが発展していきました。

もう一つ伏線があるんです。農家がトラクタや作業機を買うものですから、機械化貧乏といわれました。農協組合長会で農機具の不買論まで出たほどです。展示会を封鎖しろなんていうこともありました。でも農家にしてみれば、トラクタに切り替えて、新しい技術情報がほしいわけです。ここにきてトラクタメーカーなど賛助会員たちも参加してきたので、ただの人の集まりでなく、５００人くらい集まるときもありました。波にも乗ったんですね。スガノの反骨精神というかあるいはシビアな経営感覚というのが今日を形作ったのだと私は思います。

土を作る農業経営者の哲学

昆　土を考える会は、当時の一番厳しい目を持った農家の方々が集まってスガノにクレームをつけるような集まりでもありました。でも、共に何かを作っていこうという思いがありました。大変な勢いでしたね。玉手さんも会長をなさいましたが、玉手さんが土を考える会に入るきっかけは何だったのでしょうか。

玉手博章　地元の農機ディーラーの紹介から始まりました。近隣の農家が一緒に行かないかと誘ってくれまして、家には第2回の資料がありました。ただ、そこには出ていないと思います。次の第3回からはずっと出ています。最初に夜の講演を聞いたんですが、勝部徳太郎さんの大講演会では会場に８００人くらいいたと思います。すごい人数でした。その一番前で話を聞いて、とんでもない農家がいるものだと思いました。

昆　私も参加して、その当時からすると今の土を考える会というか、今の北海道農業は少し情けなくなっているんではないでしょうか。勝部さん、あのころの雰囲気を伝えることはできますか。

勝部　今日、ここに来るまで玉手さんと車の中で話をしてきました。ちょうど今は麦の収穫時期です。さまざまな麦畑があります。僕は農地というのは自己所有になっているけど、実は国民の皆さんからの預かりものだと思っています。だから大事にしようという意味も込めて言うんですが、どう見ても1反１００kgとか２００kg程度じゃないかと思える麦畑がたくさんあるわけです。強いて言えばそれは犯罪です。預かり物を粗末にして、彼らは努力もしない。言葉が悪いけど怠け者。そして、そんな人たちでも農業をやっていける制度を農水省が準備してしまう。しかも、その農水省が自給力向上を叫んでいる。自給力向上戦略なんて簡単ですよね。そういう人たちが農業をやっていけなくすれば簡単に自給率は上がる。片方では自給率を上げたい。片方では上げない農家の人を支援している。誠に不思議な時代。これで誰がもうかるんだろうねと話をしてきました。まさしくそんな感じで、農業団体も一役を担っています。国民が納めた税金を使って立派な農業になれと支援をいただいているなかで、それを活かすことのできない農家はこのへんで選択をしないと日本の農業そのものが不幸になるような気がします。そんな意気込みがなくても飯を食っていけるという悪い癖がついてしまったように思いますが。

昆　徳太郎さんが1反歩で食えない奴は何百町歩やっても食えないということを言っておられましたが、土を考える会が始まったとき、勝部農場はどのくらいありましたか。

勝部　70町歩くらいかな。

昆　網走の石川さんにお目にかかったときに、「勝部が70町歩なら俺はもっとやってやるぞ」というような競争心が皆にあったとおっしゃっておられました。徳太郎さんが言うとおり、そういう方々は面積が大きいだけではなくて本当に土を作っていたわけですね。

村井　土を考える会の当初はね、実演研究会をやって、ホテルに行って午後に研修会でした。徳太郎さんはね、4回目から講演しているんです。４回目が「土と生きる」、5回目は「ある百姓の遺言」、６回目は「この黒土に命を賭けよ」。土作りの基本をやっているから訴えるところが大きいものがありました。実際に70ha、80haも持っているわけですから。

昆　そこで語られたのは技術の問題でもあるんですが、哲学というか生き方の問題でした。そのことに期待する人々も集まっていましたね。先ほど勝部さんがおっしゃっていたことでもありますが、戸別所得補償の交付金がまったくいけないとは思いません。でも、あるレベルの人にとってそれは生活保護になっています。まともな土壌管理をしないでも面積だけ増やせばそれだけで交付金が支払われてしまう。これでは駄農の勧めです。今こそ土を考える会に集まった人たちの思いというのを復興

させないと、北海道に限らず日本農業は滅びるという感じです。

玉手　僕はもともと農業関係の学校を出て就農したわけではなくて、農業に対する知識は自分が積極的によそに求めに行かなければわかりませんでした。そういう情報とか技術に飢えていたんですね。これはいい研修の場だと思って毎回のように参加しました。最初、哲学の部分はまったくぴんとこなかったんですが、失敗を繰り返すうちにこの哲学がわかるようになります。そうやってわかるようになって初めて経営に結びついてきたのではないかなと思います。

基盤整備で壊された田にプラウを

昆　田中さんや矢久保さんはプラウなんてほとんど見たこともなかった都府県からお越しになっているわけですが、田中さんは祥孝さんとの出会い、プラウとの出会いはどんなことだったんですか。

田中正保　私は昭和40年代の初めに農業学校を出て、もともと養豚でスタートしました。でも昭和45年に減反・転作、そして地域で構造改善事業というものが始まります。そのときの工事が本当に上っ面の土をちょっとはがしてあとは石も何も関係なしに大型重機で何十回と走って踏み固め、上だけさっとならして、はいでき上がりというようなものでした。当時の農家はまだ耕うん機か10馬力程度のトラクタが入り始めたくらいのときです。機械は壊れるし、トラブルは起こる。当時私は豚を飼いながら横で見ていたわけですが、石があり、がんがんに固まった田んぼをほぐすだとか、そういう手立てはないものだろうかと北海道に来てみたんです。そして、大型のトラクタやプラウを見ます。それが昭和53年くらいですかね。

　地域の人たちの手に負えない田んぼを何とかしようと考えて、70馬力、80馬力くらいのトラクタを導入しました。さらに、昭和57年くらいに北海道でも台数が少なかった１３０馬力を鳥取に引っ張ってきます。土作りというより、構造改善で何ともしようがなくなった田んぼをどうするかということから耕種農業にかかわり始めたのです。転作にかかわることがまず土をほぐすことでした。水田地帯ですけど、20インチの３連、４連プラウを同時に入れ、それを水田で使って20㎝、30㎝とひっくり返しました。当時は田んぼをプラウで起こすと地主がすっ飛んできて、「やめてくれ」なんていう時代でした。そんな人たちを含めて、今、私は約１００haの経営で、２００戸くらいの農家から土地を借りていて、田んぼの枚数も４５０枚くらいあります。初めて使ったのがスガノのプラウだったものですから、逆に祥孝さんが「鳥取で20インチの大きなプラウを本当に使っているのですか」とおたずねくださいました。お付き合いはそのときからです。

昆　当時であれば１３０馬力のトラクタなんて水田地帯では補助金の対象にならなかったんでは。

田中　いろんな制度はあったんです。利子の補てんとか半額助成だとか。先ほど言ったように、耕うん機が10馬力くらいのトラクタに変わり、集団だとか農協が導入しているのが30馬力、40馬力の時代ですから、とんでもない話なんですね。転作事業のことで県とかいろんなところに相談に行きますと、「過剰投資も甚だしい、まして１００馬力を超えるトラクタなんて対象外もいいところだ」と。昭和50年代半ばの鳥取では、「ここは鳥取ですよ、北海道ではない」なんて言われました。私がサブソイラのことを話すと、専門技術員でも「サブソイラとは何ですか」と逆に聞かれるような時代でした。北海道だったら先輩とかやり方とかいっぱいあったのかもしれませんが、鳥取で大豆を作るのは文字通り手探りでした。

昆　田中さんは１００ha規模の借地経営でほとんどが地続きの農地です。田中さんがそういう機械を装備して転作を全部受け、しかも補助金はみな地権者に渡して、あなたは土方に行っていました。田中さんが農地の集積をできているというのはそういうことで地権者を納得させていったところがあると思います。よく役人や学者は農地の集積が難しい

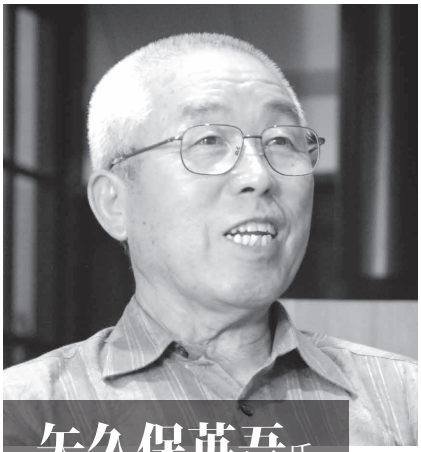


田中正保氏
（鳥取県八頭町）
90haの経営面積のうち、自作地はわずか0.9haで、借地人は200人弱に上る。地権者と友好的な関係を築くことで総枚数にして400を超える圃場の８割方が自宅の３㎞半に集中している。水稲、豆類、ネギなどを生産し、加工品も多数手がける。

と言うんですが、農地の集積も経営力の一つですね。まさに田中さんがそれを実現しました。そのあたりも祥孝さんの積年良土思想に通じるものがあります。やってきた土作りの結果というのが、現在の非常に高く売れるコメや黒豆、ネギにつながっていると思います。

田中　１００haのなかで、一部は８kmくらい離れたところもありますが、８割方が３km半以内でまとまっています。トラクタで走っても10分か15分くらい。ブロック的には30haとか15haとかがつながっています。それは転作を絡めたということもありますが、私は農地を借りますが転作奨励金が出るなら、それは田んぼを貸してくれる人に渡したらいい。それは地代じゃない。自分は農地をタダで借りられるので、行政絡みのお金は貸してくれる人に出す。それが３万円であっても５万円であっても10万円であっても、それは私が決めた金額ではありません。

　それと、でっかいトラクタを入れて、10cm、20cm、30cmという耕起作業をやっているのを周りの人は見ています。当然、でっかい石も出てきますが、それは拾う。そして堆肥を入れる。先々に良いものができる条件を作るのが私の仕事です。そうやっているなかで、20代半ばの正月の初寄り合いのときにお呼びがかかりました。田んぼの話をしてくれと。その初寄り合いに出ると、田んぼの貸し借りや構造改善をどうするのかとなりました。そうこうした次の日に何と自分の村を全部まとめて田中さんに貸そうという話になったんだけど。そういうことがあるのでブロックでまとまります。うちの村から隣の村というふうに農地がつながって、ずっとたどっていくと30haがつながったわけですね。



矢久保英吾氏
（秋田県大潟村）
29歳で秋田県大潟村に入植。コメの移植栽培への疑問と、イネが本来持つ生命力を引き出すことに徹すれば均平技術を前提に必ず増収につながるとの信念で、乾田直播を始める。その第一人者として知られる。

昆　ありがとうございます。まさに積年良土を経営においても技術においても実践されてきた田中さんですね。次に、矢久保さんです。東北の農民は米の呪縛、移植の呪縛に縛られていて、それから解放されない限り農業は変わらないと喝破されたのが矢久保さんです。ご自身がイチゴ作りをしたいという夢から乾田直播に取り組んでこられました。今や東北地方の乾田直播の先生役が矢久保さんだと思いますが、その取り組みあるいはそれ以前からの祥孝さんやスガノとのかかわりをお話しください。そもそも乾田直播に取り組まれたのは何年ですか。

乾田直播の夢を与えたスガノ

矢久保英吾　秋田県の大潟村に入植したのは昭和42年です。私は昭和38年までアメリカにいて、帰ってきて大潟村に入りました。実は入植１年目に乾田直播をやったんです。でも、芽は出たけど、うまくいかず、全部代かきして植え直しました。青森から山形、秋田県全域に苗集めに走って、大型バス４、５台の人を頼んできて植え返しました。あの当時の気持ちが忘れられず、今に至っています。

　プラウはスガノが大潟村に来てテストしていたのを見にいったのがきっかけです。見事に水田プラウで起こしていくところでした。そのころ始まった、あきたこまち生産者協会の４人に話し、試しに１台共同で買って起こし始めました。ほかの３人はやらなかったんですが、私の田んぼは条件もある程度良かったのでプラウで起こしてみました。祥孝さんの告別式のときもお話しさせてい



昆 吉則
本誌編集長

ただきましたが、その後、プラウ耕をしながら直播のテストを15年続け、ようやくお米の力を引き出すことができるようになったという気持ちです。今までずっと直播をやってきて思うのは、本当にお米を作るのだとすれば、田植機稲作ではなく直播の米作りを完成することじゃないか。そして、収量も稲の生命力を我々が本当に生かせる作土の条件作りができたら種の力はまだまだあると思います。これからコメを作る場合の目標は1反当たり1tに置き、いかに近づけるかでしょう。今年、一粒点播できる機械を使ってみた状況を見ると可能だなという気がするんです。一週間ごとに稲は分けつします。すると、一粒でだいたい60本にはなります。種もみと種もみの間隔をいかに決めていくかということと、どれだけそろった種もみをまくことができるか。品種設定も含めて不可能ではないと思います。今年まいた機械というのは2・5cmからセットしているんですけど、秋田の場合はあきたこまちで何cmにすればいいのか。10cmくらいのピッチでまいて15本くらいの有効分けつを取れるとすれば相当の収量には行き着くでしょう。そして、直播の稲というのは種まきが遅かったとしても移植の稲に追いついてしまいます。だいたい7～8葉くらいに追いつく。北海道の稲が今（7月27日）、花が咲きかかっているところです。品種の特性もありますが、これを逆に直播にするとすごく可能性が広がるのではないかと思います。

　勝部さんの深起こしのこととか土に対する考え方は稲にも通じます。私が今プラウで起こすのは25～28cmくらい。これが30cmを超えるまでの田んぼになったらもっと可能性の幅が広がる。だとすれば、10町歩ある面積を半分くらいまでに縮小しても成り立つ日本の米作りを目指したいです。約100人のメンバーによる東北土を考える会の仲間たちがそういう技術を習得して技術交換をしていけば、味が良くてなおかつ収量も上がり、そして土地の本当の意味での利用度を高めていくことができるようになると思います。

昆　直播のこと、播種機のこと、一粒点播の篤農的な技術の追求にも触れられましたが、ベースはいかにきちっとした作土を作るか、平らな圃場を作るかなんでしょうね。

矢久保　それをなくしてできませんね。深さといい、均平度といい、そして周りの排水の問題とかいろいろあります。土作りそのものは麦もコメも同じだろうと思います。

（次回に続く）

故菅野祥孝儀　お別れの会

（スガノ農機㈱相談役）

日時：９月１日（木）
午後２時～午後４時15分

場所：プラザトミヤマ
北海道空知郡上富良野町本町 1-1-5
☎ 0167-45-2254

本件などに関するお問い合わせは
スガノ農機㈱
☎ 029-886-0031

スガノ農機㈱相談役　菅野祥孝

収量3倍、4倍を目指す農業経営者の登場に期待する

2005年7月号再録

本誌を物心両面から支援していただいているスガノ農機の菅野祥孝氏が今年、同社の社長を退任し、相談役に就かれた。同氏の退任に当って、本誌編集長が菅野氏の農業経営者に向けたメッセージを聞いた。

昆　菅野相談役は2月にスガノ農機の社長を退任し、相談役に就任されました。実は、本誌のテーマの一つが世代交代なのですが、ご退任にあったって本誌読者に向かってのメッセージをお願いいたします。

固定概念から自由になれ

菅野　今、私が一番強く思っているのは、コメも麦も大豆もビートもジャガイモにしても、日本ではなぜこんなに収量が低いのだろうということです。もっと真剣に増収の努力をすべきと思うのです。

昆　畑作物が欧米先進国より収量が低いのは昔からかもしれませんが、いまその差は広がっています。

菅野　なぜ、それで満足するのでしょうか。理由を「良質米だから収量が落ちる」と言いますが、食味も収量も高い技術体系を作るという欲や夢を、経営者としてなぜ持たないのでしょう。

昆　現状に満足してるのでしょう。

菅野　健全な栽培環境で収量が上がるときは品質も上がるはずです。それをなぜもっと追求しないのでしょうか。そのための技術革新や投資が経営であり、それを考えるのが経営者のはずです。

昆　努力をしなくても食えてしまいますから。保護主義に慣らされて、夢を失ってしまったのでしょう。

菅野　日本はコストが高いと言われますが、コストを下げるもっとも有効な方法は「増収」でしょう。

昆　ええ。日本は規模が小さいから海外に負けるという論理が中心になっていますが、収量を上げて損をすることなどないはずです。

菅野　固定観念でガチガチになってしまっています。コメは10俵以上とると品質が下がるとか、減反の原因を作ってしまうとか……理屈をこねて問題をすりかえてしまう。それは駄目な経営者が言うことです。

昆　まだ国が農民を食わせる時代が続くと思っているのでしょう。農水省ももう方向転換しているのに。

菅野　スガノは「増収のためにレーザーを使って均平させましょう」といってますが「そんなもの出来たって、圃場が狭くて機械が角を曲がれない」ということではどうにもなりません。もちろん機械が合うような圃場にできればいいのですが、なかなかそうもいかない。そうすると「機械化したいが機械が高い」「圃場が小さく農道も狭いから大きな機械が使えない」などと決めてかかる。これは経営者の言葉ではありません。農道のT字路が狭くて曲がれないのなら、角を丸くすればよい。それで機械は通れるようになります。府県でも圃場の一辺を250、300mにすることはできませんか？　工夫をすれば可能になることはまだまだあるのではないですか？

　固定観念を越えて初めて変われるか、変われないかを発想できる。し

かもどう変わりたいのかという明確なイメージを持っているかどうか。それがない人は消えていくことでしょう。

昆　世代が交代しても、発想の古い若者では困りますね。

菅野　でも、若い人は若い人なりの能力や可能性を持っています。それを引き出せないのは、親世代がよい環境を作ることができていないということもあります。若者が自分自身で考え、知恵や工夫を引き出せるような指導を、親ができない。

昆　むしろ親の問題ですね。

菅野　それができなければ去るよりほかはないのです。

夢を追ったから現在がある

昆　府県にプラウ農法を定着させるのにはご苦労が多かったでしょう。

菅野　雪が解けないと種は播けない。春なのか夏なのか秋なのかを見定めないと、徒労に終わります。

昆　でも、利用が少ないということはそれだけ市場としての可能性が大きいということであり、さらに、府県に出てこない限り今のスガノはあり得なかったのでは？

菅野　その通りですね。

昆　スガノ農機は北海道の農機メーカーの中で、唯一府県に進出されましたが、なぜチャレンジできたのか。またそれは相談役にとって何だったのでしょうか。

菅野　当時の私にとって、こちらに来て工場を建て、府県を市場にするというテーマは「あたりまえの真ん中」のことでした。でもそれだけのために来たわけではありません。ここで日本だからできる技術で新しい日本のプラウを作り、その工場を世界各地に作り、地域の農業に役立てたいと考えていました。そのためには本州に市場を作ってお客さんの力を借りる必要がありました。

昆　それに先立って、すでに北海道内で市場を獲得していたビートハーベスタをその技術や商権ごと他社に譲り、あらためてプラウとサブソイラだけのメーカーになって府県に出てこられたわけですよね。今考えれば、それもこれまでの成功の理由であるような気もしますが、当時北海道メーカーは生産機種を広げている時代でした。皆と違う道を選び、もうかっているものを止めるのは勇気のいること。経営戦略の変更は誰にでもできることではありません。

菅野　勇気があったわけではありません。北海道の市場だけでは生きてはいけないと思ったからです。それ以上に先ほど申し上げた「夢」を果



菅野祥孝

■プロフィール（すがの・しょうこう）
1933年生まれ。敗戦で満州国より旧制中学2年で帰国。1972年、スガノ農機の3代目社長に就任。1980年、日本のプラウの開発を目指し茨城県土浦市に進出。1992年、創業の地である北海道上富良野町に土をテーマにした博物館「土の館」を建設。同館は2004年10月「北海道遺産」として選定された。今年1月、代表取締役社長を退き相談役に。


上富良野の「土の館」にて

編集長インタビュー

たすために、阻害要因となる仕事は集約せざるを得ません。限られた経営資源をプラウに集中させ、夢に賭けたい。自分にとってそれほど大した決断ではありませんでしたよ。

昆　夢を追ったから現在がある。

菅野　ところがこちら（府県）の市場がまるで作れない。それができなくては私の夢は実現しません。私の代で、夢は考えた百分の一、いや十分の一も実現していません。それは私の経営者としての限界です。だから新しい世代に託さなければならないのです。

昆　そんな菅野祥孝の言葉や行動に影響を受け、それを自分を見つめる合わせ鏡にした農業経営者もたくさんいます。私もそうですし、社員のみなさんもそうでしょう。

菅野　月ロケットを飛ばす時代になっても人は三度三度、大地から作られる食べ物を食べます。農業という「業」は永遠に続いていくはずです。そこに視点を当てれば農業に対する夢は限りなく広がるはずです。

「土を作れば作物勝手にそだつ」

昆　菅野相談役はよく、塩類の集積したペルーの砂漠をオレンジの森に変えた日本人の農業経営者のことを話題にされ、またそのことをスガノ農機の将来計画にも役立てられたともおっしゃっていましたね。

菅野　鉱物資源は掘り出してしまえばそれっきりの有限の資源です。ペルーのいわば「不毛の地」を農業経営者がオレンジの森に変えた事実を目の当たりのしたとき、大地とは財宝であり、そこに農業の無限の可能性と夢を見たのです。人間の努力があれば不毛の砂漠を農地に変えられるということ、そしてそれを実現する経営の意味を考えてきました。ところが往々にしてわれわれは、現在の状況や環境、これまでの乏しい経験や知識だけで未来の可能性を否定してしまうところがあります。

昆　はい。

菅野　北海道の勝部征矢さんは何年かに一度１ｍの耕起をされているのですが、それを笑う人がいます。でも、勝部さんは圧倒的な収量を誇っています。馬耕の時代は10㎝を起すのがせいぜいでしたから、いまのように30㎝などというのは「無理」と笑ったことでしょう。いまでもほとんどの農家は土を10㎝か20㎝しか使っていません。しかし根は１ｍ以上に伸びます。１ｍ起こせたらまた別の可能性が生まれると思いませんか？

昆　いまある常識を捨てるということですね。

菅野　千年も生きる巨木があります。連作障害とは無縁の世界がひろがっています。そこにはきっと大きな根が張っていることでしょう。いまわれわれは10俵しか取れないコメの根しか見ていないのです。30俵のコメはきっと大きな根を持つはずです。

昆　自然の力を最大限に活かす農業ということですね。

菅野　タダの空気、タダの水、タダの微生物を使う。それに微生物の餌となる有機物を戻す。するとその微生物が理想的な土壌を作ってくれるわけです。こんな安上がりなことありますか？　それらを有効に活かすのが人間の役目であり、その環境を作ることが経営です。

昆　この原理原則はどんな作目、どんな商売にも通じることですね。

菅野　まったく同じで、規模も関係ありません。要は固定観念にガチガチになった頭を自由にすること。「土を作れば作物勝手に育つ」です。われわれの経営も同じです。

昆　人によって収量が倍になるなんてこともある。

菅野　イヤ、倍なんてまだ常識の範囲。３倍、４倍を目指すべきです。農業では一粒が２０００粒になる。千円札が２００万円ですよ。こんな効率のよい仕事はありません。

昆　能力のある者が活躍できる時代が、農業にもやって来た。

菅野　本物の経営者が必要になります。農業の時代はこれからです。

昆　今後のご計画は？

菅野　スガノの社長という生々しい立場を離れて、皆様と一緒に農業経営のことを考えていきたいです。